
【特集】日本労働遺産

特集にあたって

榎 一江



認定を受けた4団体のうち3団体のの方々

本特集は、日本労働ペンクラブが創設40周年記念事業として2022年1月に認定した「労働遺産」の認定資料とその所蔵（管理）機関を紹介する。

日本労働ペンクラブは、「人間の基本的営為である労働を中心課題とし、労働に関わる政治、経済、社会、福祉、文化などの諸課題について言論、研究、出版等の活動に関わる者の親睦・交流・相互研究の場とする」（規約第2条）ことを目的に1981年1月に結成された。ジャーナリストだけでなく、研究者、労組幹部などで構成され、研究、意見交換など切磋琢磨することを目指し、発足時50人だった会員は、現在約200人となっている。

働く現場の歴史を後世に伝承することを目的とする「労働遺産」の認定は、当初、創設40周年の2021年1月の総会で対象団体に認定証を交付する予定であったという。しかし、コロナ禍のため1年遅れの2022年1月13日の総会において、初の認定証が2件、4団体に交付された。具体的には、1「川崎・三菱大争議など大正時代の関西労働運動の記録」、2「近代的労働運動発祥の地記念碑と遺構」が認定の対象となり、これらを所有、管理する4団体に認定証が交付された。本特集は、日本の労働遺産第1号に認定された4団体のうち3団体の寄稿により構成される。

榎一江『『労働者新聞』・神戸川崎三菱大争議の実写フィルムと大原社会問題研究所』は、法政大学大原社会問題研究所資料担当研究員による認定資料の解説である。ここでは、賀川豊彦が編集顧問を務めた『労働者新聞』と彼が指導した川崎・三菱大争議の映像資料が取り上げられる。

杉浦秀典『『死線を越えて』草稿と賀川豊彦記念松沢資料館』は、賀川豊彦記念松沢資料館副館長・学芸員による賀川豊彦とその小説『死線を越えて』の解説である。2022年に開館40周年を迎えた同館の活動も紹介される。

間宮悠紀雄『「日本労働運動発祥之地」石碑・惟一館煉瓦堀跡と日本労働会館』は、友愛労働歴史館前事務局長による1894年に建設されたユニテリアン教会・惟一館に関する解説である。現在の友愛会館が、日本社会主義運動の発祥の地とされ、また日本労働運動の発祥の地とも呼ばれる理由が説明される。

いずれも認定資料の紹介だけでなく、所蔵（管理）機関の歴史や活動、その他の所蔵資料にも言及されており、興味深い。「労働遺産」の認定を機に、資料館や記念館の役割を再確認する機会となれば幸いである。

（えのき・かずえ 法政大学大原社会問題研究所教授）